

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	隨感漫録 : 雜録
Author(s)	長池生
Citation	龍南會雜誌, 98: 58-65
Issue date	1903-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5526">http://hdl.handle.net/2298/5526</a>
Right	

あゝ慕はしきかな、懐かしきかな吾か友梨雨。

梅花寒空に舞ふの夕、病床にて。

## 隨感漫錄

長 池 生

○感ずるに従ひて漫然として録す。漫録は終に漫録なり、もとより士君子の一顧にだも値せず。  
○春雨蕭々たり、窓外簷滴の音かすかに、晝猶は夜のごとく静かなり。思ふ、冬の神、寒風と雪と氷とを收めて北天に去れば、春雨は絲の如く降りて青帝の先驅となす。この雨の地上に落つるや、一滴一滴各々土をくぐりて入り、花の種、多年生草の地下莖、灌木の根喬木の根に到りて、之れを濕はし、之に告ぐるに春の來るを以てし、根毎に種毎に生々の妙氣を鼓吹す。これによりて、冬の間を畏縮と昏死との間に過せる彼等は、忽然として其の生命を回復し、潑々たる生氣を得、炎々たる希望に充ちて、早く春光に浴すべく争ふて芽を萌し蕾を含む。春雨は又芽の末蕾の縁を霑し、更に彼等の發展を刺激し鼓吹するなり。これよりして天はますます暖かに、芽は緑鮮かなる若葉となり、蕾は花となり花は香を放ち、乾坤一如悖然として希望の光、生々の氣遍耀横溢し、もの皆活動の路に進むなり。

嗚呼冬の眺は荒涼悽慘として死の色を帯びしも。春雨一過して天地に生命あり。試に手を伸ばして

窓外一滴の雨を掬ひ見れば、其の一滴は塵よりも纖かなり、然れども、無限の活氣生氣其の源をこの一滴の刺激に發するを思へば、其の力の偉大崇莊に覺せず額かすんばあらず。

○自然は人間のためにのみ存せざれども、人間は自然によりて得るところ甚だ大なり。殊に自然の風物が人間に與ふる教訓激勵に至りては、其の博大深邃極りなし、夫の哲人聖者の説く所、遂に一步も自然が語る範疇を出でず。孔子川上にありて曰へり、逝く者はこのときか晝夜含ますと。又基督は野の百合を指して語れり、ソロモンの榮華の極もこの花の一片にしかずと。思ふに聖者の訓は直に是れ自然の訓なり、されど世常に聖者なし、なまじいに紛々たる人間の語を聞きて謬多からんよりは、去りて自然の聲なき聲に聽かんにしかず。

○秋天水のごとく澄み、一輪の皓月千里を照すとき、自然の力は人間を俗塵の裏より引き去り、寂然無境裡に彷徨し、宇宙靈妙の眞機に參交せしむ。秋の自然は其の壯重肅嚴まことに哲人の如し、之に反し春の天地は彩華燦として、内一道の熱氣を含むこと詩人に似たり。而して春の語は詩人のごとく熱あり力あり。人の世は苦惱憂愁行路に充積し、嶮巇極まりなく暗憊の闇深し。人は如何にしてかゝる世に憂を排し惱を去り、險巇と戦ひ闇に光を投ぐべきかは、唯春之を教ふ。曰く、爾の希望を燃せ、爾の元氣を振へ、而して只動け進め。路險しくば鋤を以て平かにせよ、荆棘前を塞がば亦を揮ひて截り去れ、闇深かくば燈を點せよ、雲厚くば風を誘ひ來りて吹き拂へど。嗚呼一路昂上の念内に炎々たらば、此の一念やがて險を平にする鋤たり、荆棘を截る刃たり、闇を照す燈たり、雲を闢く風たるなり。

○維新革命以來西歐文明の流は滔々として潮の寄することく大和島根を洗ひぬ。三千年の間洋中の

一島に躊躇し、僅かに東洋文化の光に浴せし大和民族の眼には、西歐文明の物質的光彩は天日の光のさどく輝きたりき。彼等は其の光に眩耀し、惛瞑し、物質の中に全身を没却し、彼等が渴仰崇拜の念は物質的文明の皮想に向つて傾注せられたり。而して一觀すれば物質的文明の生産者は黄金なるが如し。これを以て物質的文明の崇拜はやがて黄金の崇拜となり、黄金の光に沿ひて、あらゆる罪惡、あらゆる慘事、列をなして連る。思ふに物質的文明は其の根底には靈的源泉を有するものなれども、其の返照する處は物質の色なり、物質の光は淺くして彩り華かなり。靈の光は深かくして微かなり。微なるものは見難く彩華爛熳たるものは眼に入り易し。大和民族が物質文明の皮想に没溺せしも亦理なきにあらずしか、然れども之一國民たるものゝ態度として決して誇るべきものにあらず。況んや彼等は之がために彼等の寧ろ精神的なる東洋文明によりて得來りし靈的立脚地を殆んど根底より覆へしたり。而して彼等は靈なき人となりぬ。

靈は人間の主宰なり。靈を失ひては彼等の手足は只技師なき機械の如く動くのみ。されど技師なき機械の運轉に有益なる効果は期すべからず、機械は遂に其の油を失ひ、摩擦は熱を發し、機械は遂に自ら燃え、自ら破壊せずばやまざるべし。靈を失ひたる國民の前途は知るべきのみ。見よ滅亡の二字は高く彼方に掲げられつゝあるにあらずや。

○文明の根底には必ず精神あり。この精神を體する人間の一團は、止まらんとして能はず、只其の精神發展の方向を指して進むなり。かくして其の精神の異なるにしたがひ、各種の文明は世界の上に現出したり。支那文明、印度文明、乃至希臘、伯布來、羅馬の文明各々其の特質を有すと雖も、要するに皆各民族の中に輝きし大精神の發展に外ならず。只この精神ありてはじめて文明に生命あり、

進歩あるなり。然らば吾が帝國現時の文明に何の精神ありや、吾が帝國文明永遠の發達進歩を助け、吾が民族に將來不朽の光榮を維持すべき何の根底ありや。

○太初大和民族は偉大なる宇内統一の精神を以て日本帝國を建設したり。後佛陀の教海を渡りて入り來るや、我が民族は此の教の外護と育成とを以て國民的天職なりと思惟したりき。先きには統一の精神後には佛教の擁護、此の二精神は日本上代の文明を醗酵し、日本民族存在の意義なりき。下りて政權武門に移り、日本は新に武士なる一階級を生じ日本民族存在の意義は即武士存在の意義となり、而して武士なる階級は其の存在の意義を武士道なるものに求め、自ら社會の中心となり輻輳となり、典型となれり。此の時より吾が國は孤立するの姿となり、元寇の時に一度、元龜天正の際に一度、國民的自覺を喚起せしと雖も、徳川幕府鎖國を以て國是とするに至りてや、我が島帝國愈々孤島の獨立の生活に入り、我が帝國存在の意義は全く國民的意識より離却したりと雖も武士道なるものは尙ほ我か民族の存在を無意義たらしめざりき。

東漸せる西力は十九世紀の初頭に及びて東亞の極端に達せり。其の海邊に浮び來りし黒船は、數百年昏睡の夢を破りて日本民の國民的大自覺を喚起したり。極端なる自己崇拜の排他主義は攘夷の大叫喚となり、同時に國民的存在の意義を問ふ念漸く人々の腦裏に萌芽し、遂に二個の主權の存立を否認して尊王の大義唱導せられ、やがて徳川幕府の滅亡となり、明治維新となり、我が國民は躍然として世界の競争場裏に其の双脚を投じたり。蓋し、三千年の史上未だ曾て此の時のごとく激烈なる國民的自覺の我が國民の頭上に來りしことあらざりき。日本民族は自己の存立を安固にし、自己狀貌を飾るがために、世界史上に比類なき、奮勵と努力とをなしたりき。然るに悲しむべし。潮の

如く輸入したる物質文明の光は日本民族内心の自覺の光を沒消せしめたり。時代の指導者たる偉人の消滅と共に、此自覺は夢の如く消え我が國民は只此の自覺より生じたる者の形骸を辿りつゝ、外部の壓迫に余儀なくせられ、茲に三拾年の文明を進涉せしめたり。彼等には何等前途の標的もなくして、只一步進みて一步を探ぐり、盲人の如く進みたり。然れども其の活動進歩の自ら何の爲めにしつゝありや、何の爲めになさるべからずして爲しつゝありやを問へば彼等は茫然とし答ふる所なし。彼等の活動は全く無精神とありたりたり。

抑も精神なき活動は原動力を失へる活動なり。原動力を失へる活動は其の隋力の去ると共に停止すべき定命を有す。しかのみならず、國民存在の眞意義は其の獨立的自發的活動をなし得るにありとせば、只隋力と外部の壓迫によりて余儀なく活動しつゝある國民は、たとひ活動しつゝあるも既に其の存在の意義を失へるものにあらずや。然らば即ち我が國の存在は魂を脱却したる形骸的存在にあらずや。形骸にも存在す、殆んど之れ滅亡なり。

○十九世紀の末葉より、世界に於ける帝國主義の活動は更に一段の活氣と其の範圍とを増加し擴張し、絶大なる速力を以て其の終極に達せんとす。世界を獨立的自發的能力ある三四の大帝國に分ち、他の小國はたとひ其の存在を許さるゝも、自ら活動し得ざるものとなさんとす。而して其の勢東西を以て最後の賭場となすものゝ如く、帝國意義を把持する凡ての國は今支那大陸に於て相睥睨しつゝあり。滿を持して放たずと雖も、時到来ば微細なる動機も、尙は能く、東亞の天地を大風濤の怒號裡に沒せしむる情勢既に成れるものあり。他日帝國主義の潮流が大波瀾を東亞の天に漲らすとき、其の渦中に立ち、内部既に自立の精神を失へる我が國、如何ぞ、よく其の獨立を保持し得べきや。

●往昔羅馬の世界的大帝國を建設するや、空前の偉觀なりき。然れども其の初期に當りては、共和市民的精神既に人心を去り、人々皆一種不安々恐怖の念胸に結ばれ、不確の信仰苦痛なる懷疑心に充ち、帝國存在の意義全く暗黒の雲に蔽はれさしもに危然たる大帝國も内よりして殆んど解体せんとしたりき。ことにあたりガリヤ湖畔に育成されし愛の教は、ローマ人心の奥底を貫き、大風の如く全帝國を席捲し、羅馬はこゝに新なる生命を得、宗教政治融合一致せる世界的帝國建設の新理想は羅馬人心を支配し、其の後羅馬の命脈を數世紀の久しきに持せしめたり。思ふに羅馬の危機はハンニバルの其の都門に迫らんとせしときにあらずして、寧ろこの羅馬の靈的瀕死のときにありき。而して羅馬の好運はザラの戰場にあらずして、寧ろ基督教のかの時羅馬の精神的瓦解を濟ひたるにありき。

○吾が國現時の情勢は、恰も羅馬帝政の初期に似て、更らに大困難の加はれるものあり。内に壞れんとせしも、外に大打撃者を見出さざりし羅馬よりも、内既に壞れんして、且つ外に帝國主義の絶大なる壓迫を有する日本帝國の危急は尙ほ幾層の大なるものあり。嗚呼洵に日本民族の大危機は、蒙古の船艦西海の岸を壓せし時にあらずして、寧ろ今日にあり

○日本民族の危機はまことに眼前に迫れり。然れども皇天は過去三千載其の存在を許容し、天下比類なき國体を附せし特の恩寵を、今に及びて俄かに吾が民族より取り去るべしと思はれず。果して然らんとす。見よ近時日本民族の精神的復活を叫ぶ聲漸く高きにあらずや、新帝國精神の勃興を唱ふるもの漸く多きを加ふるにあらずや。

耶蘇教のローマ人心に興へし大刺激は今や何物かによりて我が帝國民の上に繰返されんとす。何物

か新國民精神たるべき。武士道か儒教か佛教かばた基督教か。然れども此等の教は時代と場所との特色未だ拂ひ去られず、今の國民と今の時に應ずべく其形を改めずして現代人心の歸依を收攬し得べきにあらず。國民的特性國民的歴史の範圍外に立ちて妄りに理路の一邊に執着しては決して國民の渴仰を得べきにあらず。海老名彈正氏一派の基督教徒が此の点に着眼し、萬古不易の眞理、人間靈泉の眞源を基督教に取りて、更らに之れを日本民族の特質本領と調和融合せしめんとするもの、其の見識凡衆を抜くこと一段なり。時と場所とに應じ、其の變化融通滑脱自在にして、しかも、其の大本眞義は時と場所とを一貫して確然不易なるはこれ世界的宗教の世界的たる所以にして又其の宇宙の大眞理萬古不動の大道たる所以なり。何の宗教にあれ若し世界的宗教なりせば之れをとりて我國民民族的着色成功し得ば日本民族の新生活を養ふ大榮養物たり得べし、海老名氏一派の奮勵は吾人の滿腔の同情を寄する所なり。

○人格は力なり。千言萬言縷々として説話するも、理義は到底人間を動かすべき力なし。國民的精神も一度人格に宿りて出現するにあざれば、國民の心裏に鼓吹され得べからず。而して我が民心の缺陷は、其の國民的精神の喪失せるのみに止らずして、殆んど世界上凡ての現代人心の缺陷を代表せり。我が民心の要求には民族的要求と共に世界的要求あり。故を以て、我が民心を満足せしめ、其の欽仰と信賴とを得べき人格は民族的要求を補ひ民族的要求を充すこときものたると同時に、世界人心の缺陷を補ひ、世界人心の要求を充すこときものたらざるべからず。この人格は民族的特色を發揮すると同時に世界的宏大無邊の内容を包めるものならざるべからず。若し斯の如き人、日本民族の間に出でなば、恰も基督の人格が西歐文明發展に一新時期を劃し、歐洲二千年の人心活動の



大源泉となりしが如く、此の人格は更に世界文明の發展に一新時期を劃し、未來永劫世界人心活動の大源泉となると共に、この人格によりて新生命を鼓吹され新精神を附與せられたる日本民族の活動は、直ちに是世界的新福音の使徒の活動にして、日本民族の發展は則ち世界人類の發展たり、日本民族の存亡は世界人類の存亡たるに至らん。かくの如くならば日本民族は豈啻に其の滅亡より救済さるゝのみならんや、其の光榮祥福萬古千秋比倫なかるべし。嗚呼、吾人滿腔の憧憬と渴仰とは全く此の人に傾注す。皇天願くば此の人を吾等に降せ。

